研究論文：論文

小学生の Altruism 認知規定要因

感性をはぐくむ学校教育経営（１）

南澤信之*, 清水義雄**

*長野県総合教育センター, **信州大学

THE PRESCRIPTION FACTOR OF ALTRUISM RECOGNITION FOR CHILDREN

SCHOOL EDUCATION MANAGEMENT THAT PROMOTES *Kansei*(1)

Nobuyuki MINAMISAWA *, Yoshio SHIMIZU **

*Nagano total education center, 6342-4 Kataoka Shiojiri-shi Nagano 399-0711, JAPAN

**Shinsyu University, 3-15-1 Tokida Ueda-shi Nagano 386-8567, JAPAN

Abstract: Such that it is prescribed by "problem sharing nature" and "feeling sharing nature", that the receiver side, acknowledges an altrume message strongly as altruism to an altrume message, it is able to. As for it, (the survey research object in this time was an elementary school third year student low age) "the feeling sharing nature" was controlled by, the presence of the experience, even if it was. Also, the trend that is not able to be influenced by the presence of the experience, in "problem sharing nature" is able to interpret that it is controlled by the personality of the individual. Also, it resembled the scene that "is grieving over the presentation scene besides the person who has experienced it is able to such that "feeling sharing nature" is acknowledged strongly even more the person who there is not the experience, because he tries to soften the pain even if he is a little by the feeling sharing with a person.

Keywords: Altrume message, Altruism, Sharing nature

1. はじめに

人間社会が希薄化しているといわれている現在、他者に対する優しさや思いやりが失われつつあるといえる。それは大人社会ばかりでなく、子どもの社会においても同様である。凶悪犯罪の低年齢化や”いじめ”問題にみられるような陰湿かつ重大な問題は周知のとおりである。平成 11 年度において、全国の公立小・中・高等学校の児童生徒が起こした暴力行為、器物破損行為の発生状況は、学校内で発生したものが全学校の 15.2%に当たる 5,859 校において 31,055 件であった。学校種別に学校内で発生したものをみると、公立小学校では、全学校の 2.3%に当たる 561 校において 1,509 件、公立中学校では、全学校の 34.1%に当たる 3,572 校において 24,246 件、公立高等学校では、全学校の 41.6%に当たる 1,726 校において 5,300 件であった。また、平成 11 年度のいじめ発生件数は、公立小学校で 9,462 件、公立中学校で 19,383 件、公立高等学校では 2,391 件で、公立学校合計 31,369 件であった。不登校についても、公立小・中学校で 13,208 人と調査開始（平成 3 年度）以来の最多を示した[注 1]。

このような状況下において、学校場面では、これらと関連づけながら、他者を思いやる感情を altruism としてテーマ化されてきた。altruism とは自分自身よりも他者を優先する自発的傾向として位置づけられ、helping behavior として altrume behavior がなされるとされる。

1980 年代後半から altruism や altrume behavior は、重要なテーマとして研究がなされてきたが、altruism を起こす側を研究対象にするものがほとんどであり、被共感者・被援助者側を研究対象にしたものが雑観する限りにおいてきわめて少ないといえる。すなわち、共感され援助される相手が本当にそれを共感や援助として認知するか、altruism や altrume behavior として認知するかという問題をこれまであまり言及してきていなかったといえる。さらに、altruism の発現場面を子ども社会に言及し、被験者（対象）を子ども（小学生低・中学年）レベルではなされてこなかったといえる。

したがって、本稿においてはまず、子ども社会において altruism が発現した際の受け手側の観点から altruism の認知を規定している要因を推認することとした。

altruism の発現場面として、ある友人が悲しんでいるとき、その友人に何らかのメッセージを発するという場面を設定し、悲しんでいる友人が altrume メッセージを altruism として認知する要因を因子分析により推定することを試みた。

2. 方法

悲しんでいる場面において altrume メッセージの受け手側が、altrume メッセージを altruism としていかに認知するかを調べるとともに、それらを規定している要因を因子分析により推定することを目的とした。

被験者は、小学3年生36人（男子17人、女子19人）である。悲しみの場面の提示や教示（表1）、altrume メッセージ（表2）は、被験者が低年齢であるためわかりやすくするために担任教師にお願いした。

表1 提示場面と教示

〔提示場面〕

あなたは、友達に約束を破られて悲しんでいます。あなたとその友人は非常に仲が良く、今まで約束を破られたようなことは一度もなかったもので、とても悲しい思いをしています。

〔教示〕

あなたは、このような状況を他の友達に話をしました。あなたの話を聞いた後、話を聞いた友達は次のような言葉をあなたに言いました。その友達は、どのくらい、あなたのことを思っていてくれたと感じますか。あてはまる目盛りに○印を付けてください。

被験者が低年齢であるため、わかりやすくするように担任教師にお願いをし、表に示す内容を説明してもらった。

表2 altrume メッセージ項目

〔項目1〕場面転換

そんなこと忘れて、一緒に遊びに行こう。

〔項目2〕単純会話

悲しいね、かわいそうだね。

〔項目3〕達観

いろんな人がいるからね。

〔項目4〕友人非難

ひどいよね、ゆるせないよね。

〔項目5〕類例披瀝

私も同じようなことがあったからわかるよ。

〔項目6〕接触勧告

その子にあって話してみたら。

〔項目7〕情報収集

何かあったのかもね。他の友達にも聞いてみようよ。

被験者が低年齢であるため、わかりやすくするように担任教師にお願いをし、表に示す項目内容を説明してもらった。

altruism として認知する程度は、6ポイント評定のSD法を採用した。被験者が低年齢であるため、ポイント数を少なめに設定することも考えられるが、担任教師による説明を加えていることと、回答の中心化傾向が強く出そうなことが予測されたため両者を顧慮して6ポイント尺度とした。また、

被験者が設定場面と同じような経験があるか否かを「ある」「ない」の2ポイント評定をした。

3. 結果

各項目についての回答では、「全くそう思う」を6点、「そ

う思う」を5点、「どちらかというと思う」を4点、「どちらかというと思わない」を3点、「そう思わない」を2点、「ぜんぜんそう思わない」を1点として得点化した。得点が大きいほど、altrume メッセージを altruism として強く認知していることを示す。したがって、これを altruism 認知得点とした。結果は表3のとおりである。

表3 altruism認知得点

N	Variable	Min	Max	Mean	Std Dev
36	X 1	1.0	5.0	2.58	1.18
	X 2	1.0	5.0	3.07	1.38
	X 3	1.0	5.0	2.64	1.11
	X 4	2.0	6.0	3.67	1.07
	X 5	1.0	6.0	3.43	1.36
	X 6	1.0	5.0	3.61	1.31
	X 7	2.0	6.0	3.86	1.29

各項目とも Min - Max が 1 - 6、1 - 5 と幅があり、Std Dev も 1.07 - 1.38 でほぼ整理されている。また、Mean ± Std Dev も 1.40 - 5.05 と上限値・下限値を超えていないので、天井効果ないしフロア効果についても問題がないため、因子分析にかけた。表4は主成分分析の結果を示す。

表4 主成分分析の結果

Factor	1	2	3	4	5
Eigenvalue	2.970	1.751	1.094	0.742	0.213
Difference	1.212	0.656	0.352	0.529	0.035
Proportion	0.424	0.250	0.156	0.106	0.031
Cumulative	0.424	0.674	0.830	0.936	0.967
Factor	6	7			
Eigenvalue	0.178	0.052			
Difference	0.126				
Proportion	0.026	0.007			
Cumulative	0.993	1.000			

ここで、個有値の差である Difference の大きさと累積説明率である Cumulative をみていくと、Difference においては Factor 2 と Factor 3 の間には、Difference が 0.656 と大きく、Cumulative も Factor 2 までで 0.674 と 0.5 を越えるので、Factor 2 までを採用することとし、因子の抽出数を 2 とした。

これを基に、各因子と各項目との支配関係を明らかにするために、直交回転の一つであるバリマックス回転法を使用した。各因子と各項目の支配度・被支配度を示す因子負荷量と全因子による各項目の支配度を示す項目の共通性、全項目に対する各因子の支配度を示す因子の説明分散の結果は表5のとおりであった。また、このとき2因子による累積説明率は、67.4%であった。

表5 説明分散の結果

Variable	Factor 1	Factor 2	Communality Estimates
X 1	-0.869	0.379	0.898
X 2	-0.229	0.886	0.894
X 3	0.031	0.211	0.051
X 4	-0.001	0.926	0.867
X 5	-0.482	0.598	0.599
X 6	0.815	0.351	0.816
X 7	0.774	-0.107	0.629
inal C.E	2.304	2.323	4.627

表5において、因子負荷量の絶対値が 0.7 以上を示した項目の内容を顧慮して各因子の解釈をすすめるために、マーキングを行うと表6ようになる。

表6 説明分散のマーキング

Variable	Factor 1	Factor 2	+, -
X 1	*	n	-
X 2	n	*	+
X 3	n	n	n
X 4	n	*	+
X 5	n	n	n
X 6	*	n	+
X 7	*	n	+

以下マーキングにしたがって解釈をすすめることにする。

まず、Factor 1 に対しては、[項目6 接触勧告]「その子にあって話してみたら。」と[項目7 情報収集]「何かあったのかもね、他の友達に聞いてみようよ。」が正の負荷を示していた。両項目ともメッセージを与える側が悲しんでいる自分の問題を一緒に解決しようとしている内容である。これとは対照的に負の負荷を示している[項目1 場面転換]「そんなこと忘れて、一緒に遊びに行こうよ。」は、メッセージを与える側が悲しんでいる自分の問題を一緒に解決しようとは全くしない内容である。このようなことから、Factor 1 は、メッセージを与える側と悲しんでいる自分とが現状の問題を一緒に解決しようとしているか否かを規定する因子であると解釈することができ、「問題共有性」因子であるといえる。

このように、altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として強く認知することは、「問題共有性」によって起こることがわかる。逆に、altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として認知することができない場合は、X 1 (項目1) のように「問題共有性」がマイナスの方向に強く、「問題放棄性」に支配されていることによっていると考えられる。

次に、Factor 2 に対しては、[項目2 単純会話]「悲しいね、かわいそうだね。」と[項目4 友人非難]「ひどいよね、ゆるせないよね。」が正の負荷を示していた。両項目ともメッセージを与える側が悲しんでいる自分と一緒に悲しんだり、怒ったり、苦しんだりしようとしている内容である。このようなことから、Factor 2 は、メッセージを与える側と悲しんでいる自分とが現状において一緒に悲しんだり、怒ったり、苦しんだりといった共感によって、感情を共有できるか否かを規定する因子であると解釈することができ、「感情共有性」因子であるといえる。

このように、altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として強く認知することは、「感情共有性」によって起こることがわかる。

また、今回行った因子分析においては、因子軸の回転に直行回転の一つであるバリマクス回転法を使用したのも、altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として強く認知することを規定する因子として、前述した「問題共有性」と「感情共有性」は、まったく独立の要因として成立していると解釈することができる。

以上のように、悲しんでいる場面における altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として強く認知することは、この「問題共有性」と「感情共有性」によって規定されるといえる。

さらにここで解釈した各因子の標準因子得点を算出し、提示場面と類似した、「悲しんでいる場面」を体験したことがあるか否かで因子得点を比較した。

類似した体験があると回答したのは、16 人であり、類似した体験がないと回答したのは、20 人であった。そこで、体験群と非体験群との間で、「問題共有性」ならびに「感情共有性」の因子得点の平均と標準偏差を比較した結果は、表7、表8のとおりであった。

表7 群間比較

EXP=0 Unexperience				
N Obs=16				
Variable	Min	Max	Mean	Std Dev
Factor 1	-0.517	1.068	0.367	0.543
Factor 2	-1.708	0.104	-0.576	0.765
EXP=0 Experience				
N Obs=20				
Variable	Min	Max	Mean	Std Dev
Factor 1	-2.127	0.674	-0.528	1.298
Factor 2	0.524	1.922	0.873	0.731

表8 体験有無による因子得点の比較

	問題共有性		感情共有性	
	体験群	非体験群	体験群	非体験群
N	16	20	16	20
Mean	-0.528	0.367	0.873	-0.576
S.D	1.298	0.543	0.731	0.765
F比	F(1,34)=2.07		F(1,34)=8.11	
p値	p=0.195 >.10 ns		p=0.019 <.05 *	

分散分析の結果、「問題共有性」の因子得点について、群間に有意差を見ることはできなかった ($F(1,34)=2.07$, $p=0.195 >.10$ ns)。しかしながら、「感情共有性」の因子得点については、体験群の平均が非体験群の平均よりも有意に大きかった ($F(1,34)=8.11$, $p=0.019 <.05$ *)。

すなわち、提示場面と類似した、「悲しんでいる場面」を体験したことがある者は、他者との感情共有によって、いくらかでも苦痛を和らげようとするので、その体験がない者よりも「感情共有性」を強く認知するといえる。

4. 考察

altrume メッセージに対して、その受け手側が、altrume メッセージを altruism として強く認知することは、「問題共有性」と「感情共有性」によって規定されるといえる。それはたとえば低年齢(今回の調査研究対象は小学校3年生であった)であったとしても、その体験の有無によって、「感情共有性」が支配されていた。また、「問題共有性」において、その体験の有無によって左右され得ないという傾向は、個人のパーソナリティによって支配されていると解釈できる。

さまざまな課題を抱える今日の学校教育においては、「生きる力」や「感性をはぐくむ教育」がスローガンとなってきた。いじめや暴力行為等に代表されるような問題行動や不登校等の子どもの持つ問題、そして、LD等に代表されるような子どもの持つ障害をそれぞれ個別化した問題として教育における援助サービス対象の固定をすることが、必ずしも方針の決定としてなすべきものではなく、学校教育における援助サービスが対象としているのは、問題や障害を持つ子どもの状況やそれを取り巻く環境全般であるが故に、ソーシャル的なサポートが重要となってくるといえる。

感性とは、もともと感覚を基にした価値判断を伴う能力の問題が主であるが、これまでの経験や体験、そして親をはじめ影響を受けた人からの価値付けを基に自らの価値付けや他者の心理を感じ取れる力であるともいえる。そしてその力は、集団社会において、他者を思い、愛他的に行動がとれ、人間関係を作り上げていく根本のものであるといっても過言ではないであろう。

このようなことを顧慮すれば、altruism の認知は、重要なキーワードとなってくるといえる。Woods が指摘するように negotiation の場が重要である[注2]ことは間違いない。

学校教育においても、あえてこの negotiation の場を設定することにより、学校・学級集団において、子ども個人の perspectives が変容し、career が生ずる可能性は大いに秘めている。このことは、「感情共有性」に大きく作用すると思われる。

また、Bandura の相互決定論における生態学的モデル[注3]は、子ども個人の内的要因特性、具体的行動、環境から他者を理解しようとするもので、現象学的世界を共感的に理解する試みは、「問題共有性」に大きく寄与できる可能性を示唆するものであるといえる。

昨今、深刻なる問題行動の低年齢化が進む中、これらを複眼的思考にたつて、その対策のために、いかに学校教育に位置づけ、実践していくかが、今後の課題となるであろう。

5. おわりに

他者との関係性形成の欠落が問題視されてきた 1980 年代より、altruism は、重要なテーマとして研究対象となってきた。これは、これまで altruism の受け側の研究は少なく、さらに子ども社会に言及してきた研究は皆無に近い状態であった。

しかし、近年のいじめ、暴力、非行の低年齢化という問題背景から、他者との関係性を検討するにあたり、この altruism 認知は、重要な観点であるといえ、あえて、小学校3年生という低年齢層に焦点を当てた。

その結果、たとえ低年齢であったとしても、その体験の有無によって「感情共有性」が支配されていたという事実は、特記すべきことであろう。

集団社会において、他者を思い、愛他的な行動がとれ、人間関係を作り上げていくことは、今まさに必要とされているのである。

したがって、教育においても、他者との関係性形成の育成が求められており、そのための学校教育における明確な位置付けと具現化が今後の課題であろう。

注

1)平成12年度文部省学校基本調査による。

数字は、あくまでも報告された事例の数であるため、実際にはこの数を有に上わまわると推測される。

2)Woods,p.: Sociology and the school-An Interactionist view. Routledge & Kegan Paul, 125-126,1983.

3)Bandura,A.: The self-system in reciprocal determinism. American psychologist,33,344-358,1978.